

労協連だより

2ヶ月のブランクの間に、季節はすっかり冬。早々の初雪に慌てて冬支度を整えつつ、年末最後の仕事に追われている。秋から冬にかけての労協イベント街道は、歴史に確かな足跡を残す感動の連続だった。その象徴は、初の2ヶ所開催に挑んだ協同集会 in 九州 & 千葉だった。

参加者総数は、九州 900 人、千葉 800 人、合計 1700 人という最大規模だった。そして、参加者数以上に歴史的だったのは、堂本千葉県知事の 20 分間にわたる熱い連帯の挨拶である。その場に立ち会った 1 人として、身震いする思いと、協同労働のメジャーデビューのような感慨に心地よいプレッシャーを感じた。堂本知事挨拶が協同集会に咲いた象徴的な花だとしたら、咲き続けたための根や枝・幹もまた、従来になく野太いものとなった。細かくは年明けに発行予定の報告集に譲るが、特に「食と農」と「若者」の 2 つが際立って脚光を浴び、協同の価値を体現していたように感じる。これが九州・千葉両方に通じる特徴の一つだ。そしてこれは、社会の反映であり協同が求められている分野といえる。協同が生命や人生へと接近している証だろう。もう一つの特徴は、とりわけ千葉における「行政」からの参加の急増である。千葉県 NPO 室・地域福祉課、我孫子市市民活動支援課、市川市情報システム課などの人々が報告者として登場し、関係者の参加や自治労の人々の報告・参加など、「協同の公共性」が NPO にも負けず劣らず重

古村伸宏（日本労協連・事務局長）
要であることが本格的に論点となった。こうした成果を得て、協同集会は内容的に一つの峰に到達した感がある。

一方で、半年間の準備に携わった立場から見れば、仙台集会に関わった時と比べても、「運動的につくり上げていく」ことへの弱さも明らかになった。それは、対等な立場で、大きく問題意識や将来像を共有する人々を「実行委員会」を作りきれなかったことである。市民集会的な準備・構成は、前回の東京集會も含め「実行委員会 = 労協」に後退した感がある。実践・内容の発展とのアンバランスは、我々の「運動的な力や視点」が見直されるべき時期であることを示唆しているようだ。

ともあれ、協同集会で得た多くの教訓を、もっと地域でもっと具体的実践的につなげていくことが必要だ。集会後のあいさつ回りでもその期待は大きい。北九州界隈でのネットワークは形になるとうしているし、佐賀では集会準備を NPO と組んで行政を巻き込み開始される勢いだ。千葉でも本格的な労協づくりを、様々な人々と相談しながらはじめていく。シンボリックな集会と実践の根の広がりでも地域を活性化できれば、労協法の現実化も近づくはずだ。年明けには、戦略的にも社会的にも大きな意味をもつ「ケアワーカー集会」の準備が始まる。3 月中に開催予定だが、イベント屋のごとく、またあの日々が始まる。介護保険の報酬単価が見直され、制度の方向が改めて問われる時期に、私たちの地域福祉事業所とそこへ集う人々が、何をめざ

し、何に使命感を持ち、何をなすのか、その議論と共有が再び必要な時期だ。高齢者に限らず、障害者・子育て・食と農・環境など、「地域福祉」は「地域そのもの」を課題として捉え返されている。今度は、「具体的な地

域での実践の道筋」が示される、そんな集会にしていきたい。夢がなければ準備はエネルギーに運ばない。それがこの1年の教訓だ。良いお年を。

研究所たより 研究所たより

児童労働組合に出会う

先日、友人に誘われて「子どもたちが社会を変える～ペルー・ナソップを迎えて～」という集会に参加した。主催したのは、不登校の子どもの支援やフリースクールの活動を展開している「NPO東京シュレ」。97年8月に刑が執行された死刑囚・故永山則夫の遺言で彼の印税をもとにつくられたペルーの貧しい働く子どもたちを支援する「永山子ども基金」の招きで13歳から18歳までの4人のペルーの子どもが来日し、公開シンポジウムが行われたのだ。

働かなければ生きていけないペルーの子ども・若者と、いじめや登校拒否、ひきこもりといった状態の日本の子どもたちに、果たして接点はあるのか？などと思いながら聞いていたのだが、ペルーの子どもたちの報告は、正直いってかなりの衝撃だった。

テロ組織「センデロ・ルミノソ」や日本大使公邸占拠事件で有名になった「トゥパク・アマル革命運動(MRTA)」を引き合いに出すまでもなく、ペルーの経済・社会状況は相当に深刻である。しかし、来日した彼らは自分たちの苦境を訴えるわけではない。むしろ、彼らはそのような状況の中で「権利としての労働をいかに尊厳あるものにしていくか」ということを最大のテーマとしているのだ。

来日した中では最年少、13歳のリサンドロ・カセレス・ゲバラ君は、自らが働くことについてこう話す。「(児童労働がなくなるとよいという意見について) あまり賛成できません。僕はペルーが経済的に良くなっても働き続けます。働くことは権利です。自分たちがただ何かを求め、願う存在ではなくて働くことで自分たちの存在や尊厳を守りたい。誤解されているようですが、自分たちは危険な仕事や強制された仕事を拒否し、尊厳ある仕事をしたいのです。」

彼らの組織 MNNATSOP (Movimiento Nacional de Niños y Adolescentes Ttabajadores de Perú : ペルーの働く子ども・若者の全国運動 / ナソップ) は、1976年に「解放の神学」派の神父らによってつくられたキリスト教組織からスタートしているが、より「子ども自身による」自立支援組織として1996年に独立し、現在全国で約1万2,000人の働く子どもたちが参加している。詳細は東京シュレが発行したナソップ訪問記『ペルーの働く子どもたち～ある遺言のゆえ～』(2002年6月、発行・東京シュレ、<http://www.shure.or.jp/>)を参照していただきたいが、子どもたちの権利意識を高め、リーダー養成や職業訓練など、ペルー全国で活発な活動を行っている。

さらに彼らは2001年、ILOが推進する「最悪の形態の児童労働禁止条約」などをペルーが批准したことにより、国内法が改正され就労可能年齢の下限が12歳から15歳に引き上げられたことについても厳しく批判している。前出のリサンドロ君は言う「この法律の改正によって、僕たちは働いてはいけない存在として、時には、自分たちが売っている物を警察に奪われてしまうこともあります。この改正は自分たちにとって非常に不利な改正です。こういった働く権利を奪う動きについては断固として反対します。」

もちろん、教育も受けられず、無権利状態で強制的に働かされている多くの子どもたちのことを考えれば、児童労働はまさに即時撤廃を目指すべきものであるが、一方で働くことによって主体的に自らの存在証明を獲得し

成長していく子どもたちの権利を年齢を基準に奪うことはできるだろうか？同じように比較はできないかもしれないが、失業対策事業から中高年事業団、高齢者協同組合へと続く日本の労働者協同組合の運動の中で、多くの高齢者が「元気なうちは（年齢に関わらず）ずっと働きたい」と願う気持ちと根本のところで重なっているようにも思う。

「生きる」ことは主体的な作業である。ただ、現在の日本では学校でも職場でも主体的に学んだり主体的に働いたりすることは難しくなっている。だからこそ集会に参加した大人も、主催したフリースクールの子どもたちも、リサンドロ君たちの「働くことによって学び、尊厳を持って生きる」姿に共感を覚えるのではないかと考えさせられた。

(菊地 謙)

協同総合研究所 2002 年度第 3 回理事会 & 新年会 のご案内

下記のように第 3 回理事会・新年会を行います。お忙しい中とは思いますが、ご出席いただけますよう、よろしく願いいたします。

とき：2003 年 1 月 7 日（火） 15 時 00 分～ 17 時 00 分

場所：日本労協連 4 階会議室 豊島区南大塚 2 33 10 東京労働会館

議題： 活動報告 協同労働法法制化について その他

新年会

とき：17 時 00 分～ 20 時 00 分

場所：日本労協連 4 階会議室

新年会はどなたでもご自由にご参加下さい。

